Subject:【参考情報】東日本大震災の企業の対応情報 3/26

皆様へ

発災からまだ 2 週間しか経っていないのです。
対応に追われている方も、原発にはらはらして計画停電に翻弄されている方も、あっという間の 2 週間だったのではないでしょうか。
報道も落ち着いてきましたが、被災報道は過去の経験が活きていないみたいで、今回の被害者に、「今のお気持ちは」なんて聞いて何がしたいのでしょうか？それに、報道陣の陰での見苦しい言葉や発言が目立つのはどうしてでしょうか。
皆さんも同じだと思いますが、町や村が消え去り、目の前で最愛の人や友を見失い、紙一重で助かった多くの人々、などなど、どれほどのつらい悲しみを抱えておられるのか。そして、地元を離れて、見知らぬ土地で生活をしなければいけない現実。当事者でない私には、簡単に「つらいでしょうね」、「がんばりましょう」 なんてとても言葉に出来ませんし、同情することすらはばかれる気がします。

以下は回覧いただいた方からの情報などを元にしています。

ガソリン不足も解消に向かっていますが、くれぐれもご注意を。
○ 車両火災:ガソリン気化で相次ぐ 携行缶から発火 ／山形

毎日新聞 3 月 25 日(金)12 時 17 分配信

東日本大震災後のガソリン不足を受け、給油をしようと持ち運んだ携行缶などに残ったガソリンが気化したことによる車両火災が相次いでいる。総務省消防庁危険物保安室は「ガソリンは火気がなくても発火する危険な液体。常に危険物を取り扱っているという認識を」と注意を呼び掛けている。
新庄市では20日、同市金沢のパチンコ店駐車場で、携行缶を軽乗用車の後部に積んでいた男性が、エンジンキーを回したところ引火。左右の車2台を含む計3台が炎上。
天童市でも19日、携行缶代わりにバイクのガソリンタンクを軽乗用車の後部に積んでいた男性が、車内でたばこに火を付けようとしたところ引火した。

防災マップが今回は役に立たなかった現実は、これからどうすれば？
われわれの大きな課題ではないでしょうか。
○ 東日本大震災:「訓練が生きた！」 八戸・市川地区、奇跡的に犠牲者はゼロ ／青森
毎日新聞 3 月 25 日(金)11 時 55 分配信

◇全壊家屋は市内の7割、奇跡的に犠牲者はゼロ
大津波は八戸市の市川地区で市の想定を超え、避難所の小学校にまで押し寄せていた。全壊家屋は146棟で、市内の7割近くに及ぶ被害。だが死者はなく、町内会では「避難訓練や日ごろの町内会の活動が生きた」胸をなで下ろす。一方で大津波警報に気付かなかった住民や「ここまでは来ない」と逃げない人もいた。【鈴木久美】

◇半年前に実施

「昨夏の避難訓練と日ごろの民生委員らの活動が生きた」と、市川地域連合町内会の会長、音喜多市助さん（63）。地区では市や自衛隊、消防などと数百人規模の避難訓練を初めて行った。１人暮らしの高齢者は民生委員や町内会で誘導し、沿岸から約1キロの多賀小学校まで避難した。

市防災危機管理課は「毎年１回の総合防災訓練。市川地区はたまたま昨年だった」と話す。音喜多さんは「半年しかたっていなかったので、住民は地震が来たら多賀小へ逃げる行動が身についていた」と語る。

◇避難所にも津波

八戸市には津波の高さを予測した防災マップがある。市川地区ではこの想定より水が押し寄せて、数百人が逃げた多賀小も襲った。前田英規校長は「水は校舎近くの川をさかのぼり、土手を超えて校庭まであふれた」と、当時の状況を鮮明に語る。

◇警報に気づかず

橋向には海沿いに防災無線が並ぶ。しかしスピーカーの音が聞き取りづらく、風向きによっては聞こえないと住民の間で評判が悪かった。

海岸から約500メートルのイチゴ農家の女性（55）は自宅は浸水を免れたが「防災無線や消防の呼びかけがあった記憶はない。知らないうちに津波が来たと思うと恐ろしい」。別の女性は「無線が何を言ってるかよく分からず、県外からの息子の電話で警報を知った」と話した。

◇想定より300～400メートル内陸

八戸市の防災マップは、マグニチュード（M）8・6の明治三陸地震（1896年）などを想定した県の予測図を基にしている。今回の地震はM9で、この想定を超えていた。

津波の後に市が調べると、市川町の五戸川以南で想定より300～400メートル内陸側に達していた。市防災危機管理課は「津波避難計画を見直す際には多賀小を外すしかない」としている。【植松晃一】

〇「安全信じたのに」 津波訓練の避難所飲まれる、50人以上が犠牲

産経新聞 3 月 25 日(金)22 時 43 分配信

岩手県釜石市の避難所が東日本大震災の津波に飲み込まれ、避難していた50人以上が犠牲になった。震災直前に市側が行った津波避難訓練で避難先に設定されていた場所だ。安全を信じ、とっさに訓練通りに避難した市民の多くが命を落とした。肉親を失った遺族たちは「誰が責任を取るんだ」とおえつを漏らした。（高久清史、岡嶋大城）

（上田追記：防災マップの重要性は否定しませんが、そこには想定があり、災害が想定どおりにおきないと、臨機応変の対応をする心構えが必要ですね。そのためには、実効性のある即興型の訓練の繰り返しが役に立つのではないでしょうか。）

新宿西口訓練の報告会に参加された方は、人形劇を覚えておられるでしょう。

〇 64 年ぶり教科書に復活　津波防災「稲むらの火」 和歌山県内の公立小

紀伊民報 3 月 25 日(金)17 時 3 分配信

2011 年度から小学校で扱われる教科書に、安政南海地震（1854 年）の津波から村人を救った広川町の伝記「稲むらの火」が 64 年ぶりに掲載される。和歌山県内ではすべての公立小で採用される見込み。教科書での復活掲載を望んでいた広川町の西岡利記副町長は「先人の防災活動が全国の子どもの学習に役立てられることになりうれしい」と話している。

（回覧者）また、災害は繰り返すということも分かった。明治と昭和に三陸地方を襲った大津波は既知のとおりだが、江戸時代やそれ以前にも繰り返し起きている。三陸海岸には、「津波てんでんこ」という言い伝えがある。津波の時は、事前に認め合った上で「てんでんバラバラ」に逃げて一族共倒れを防ごうという意味だ。それほど、津波は急に襲いかかり、家族がまとまって逃げる暇はなく、結果的に一族全員が亡くなるということが何度もおきたのだろう。
（上田追記）「津軽てんでんこ」も「稲むらの火」も、首都圏ではどうすればよいのか、考えされられます。

○ 3 月 20 日現在の自衛隊の活動状況
防衛省発表 110320 12 時
1．派遣規模
人員 約106，600名 （陸:約69，000名、海:約16，100名、空:約21，300名）
回転翼210機、固定翼325機 艦船57隻
※ 3月14日（月）東北方総監を長とする統合任務部隊を編成
・ 3月18日（金）東北地方太平洋沖地震による被災地域において、自衛隊の部隊が実施する救援活動等に係る予備費の使用を決定（約54億円）<18日閣議決定>
2．自衛隊による救助状況
○大規模地震災害派遣による活動
・自衛隊による救助者数 約19，400名（現時点で確認されているもの）

救助者数	11日～18日	約19，400名
	19日	3名
	計	約19，400名

○原子力災害派遣による活動
・原子力災害派遣に係る除染者数（民間人のみ）約2，850名
（上田追記：自衛隊員は約 23 万人らしいので、半数が災害派遣されていることになります。さらに、不明者と同じくらいの人数を救助しています。）

○ 死者1万人超す 震災2週間、不明1万7000人超
河北新報社 3 月 26 日配信
東日本大震災の死者は25日、警察庁の午後9時のまとめで1万102人となり、1万人を超えた。家族や親族が警察へ届けた行方不明者は1万7053人で、計2万7155人に達した。震災から2週間が経過し、交通網や電気、水道、通信などライフラインの復旧は徐々に進んでいる。だが生活再建の見通しが立たない人も多く、全体で約24万人が避難生活を強いられている。
◎惜別
東日本大震災で深刻な被害を受けた気仙沼市で25日、土葬が始まった。この日は10人が埋葬され、遺族らが最後の別れを告げた。市は北東部の高台にある「鹿折みどりのふれあい広場」を市営墓地にした。（以下略）